木村　元・小玉重夫・船橋一男『教育学をつかむ』

稲　井　智　義

本書[1)]は、教職教育学とアカデミックな教育学を結びつけて「教育学」をつかむために、「ペダゴジー(教えるということ、教授方法)」という概念を導入した教育学の教科書であり、また著者は、本書を通じて、教育学の新しいパラダイムの模索を試みている。

周知のように、教育学の存立基盤が失われて久しい。たとえば、評者の研究領域である教育史研究の動向に限定して述べるならば、1980年代頃からの教育の社会史や歴史社会学の潮流は、学校教育や制度を中心に構成されていた対象を、子育てや産育、形成、言説にまで拡大させた。その後、1990年代以降には、歴史学者が教育を対象とする傾向も顕著になり、教育社会史や歴史学による教育研究もまた、教育史研究の主要な領域を担うようになっている。しかし、こうした展開は教育史研究の多様な可能性を示唆すると同時に、既存の教育史学に対して、「歴史学とは異なる教育史固有の方法論がありうるのか」という問題を突きつけるものであった[2)]。このような状況は、他の教育学研究でも同様であろうが、本書はそのなかで「教育研究や教育科学」の寄せ集めではなく、それらを含む「教育学」をつかもうと試みているのである。

さて、このような教育学をめぐる状況は、本書の「序」でわかりやすく解説されるのだが、まず全体の構成と各部の概要を確認しておきたい。全体の構成として、第Ⅰ部では「教育の基本的な原理を社会や歴史との関係」のなかに位置づけ、第Ⅱ部では「教えることと学ぶことに関わるペダゴジーの特徴」を把握し、そのうえで、第Ⅲ部では「こんにちの教育が直面する現代的諸問題から、教育の現在」が解説される（はしがき、ⅰ頁)。また「序」と「結」が、第Ⅰ部と第Ⅲ部とは別に付されている。

序「教育学とは何か」では、「教育」を「文化伝達のうちで子どもの成長の過程に意図的に働きかける行為」(２頁)と、あくまでも暫定的に定義された上で展開される。なぜなら、本書全体で強調されるように、「教育は歴史性や文化性、社会性をもった特有な存在として現実にあった」(７頁)し、これからもあり続けるからであり、また、実は「結」で種明かしされるように、本書が「理念先行型のスタイルを批判することを意識して書かれている」(265頁）ためでもある。このようにして理念先行型の教育学の立場を棄却するならば、子どもの発達を軸にした「教育的価値」に基づく戦後の教育学は基盤を持ちえなくなる。そして、教育は政治や経済、社会との関係のなかで捉える「教育科学」の対象に据えられていき、教育もその価値も相対主義的にしか定義しえない状況に直面する。この状況を「ペダゴジーとしての教育学と教育科学をめぐる問題の新しい現代的な現れ方」(７頁)とした上で、「教育の基本的な性格、教育を生みだす事実、現代において直面する新動向という３つの相」(７頁)から、教育学をつかもうと試みる。

第Ⅰ部「教育をどうとらえるか」では、教育人口動態史を旗揚げしている木村元氏が教育概念の「歴史」と、教育と「社会や子ども観、発達」との関係を、また小玉重夫氏が教育の思想的背景として、「国民国家」と「教育の目的」を解説している。ここでは、人間形成や人間性（ジェンダーやセクシュアリティ、リテラシー)という原理的地点にまで立ち返った導入がなされている。

第Ⅱ部「教えるということ」では、教育方法学の船橋一男氏を中心に、「学習論」、「教育方法論」、「教師論」が論じられる。ここは、第Ⅰ部、第Ⅲ部との関連を意識しつつ、ペダゴジーを内側からとらえていく。

第Ⅲ部「ペダゴジーをめぐる現代的な課題」では、教育政治学の構想に着手している小玉氏を中心に、教育の「制度」、「接続」、「共生の教育」が語られる。ここでは、教育の制度や接続というマクロな問題から、共生というミクロな問題まで扱われるが、第Ⅲ部のねらいは、文化的多様性を持つ人々が共生可能な社会を構築する「手段」としての教育だけではな

く、「共生可能な教育空間」を構成することにもある。そして、その一つの可能性として「シティズンシップ」が強調されている。

結「本書がつかもうとした教育学」では、本書のポジションが三つの点にあったことが明かされる。本書は、「教育の秘儀（ネタ）と公儀（ベタ）」の語りと、「教育に何ができるか」という課題に立ち戻るための社会的事実に規定されたリアルな教育認識、そして、「再政治化、多様化、複数化」した「公共性の再構成」をつかむことを目的としていたのである。そして最後に、〈「旅立ちの日に」の奇蹟〉を挙げて、そのような市民的な公共性の「伝統」を「時代の社会的文脈のなかで受け継いでいくためにも、政治と教育との新しい結びつきを思考し直していくこと」(268頁）の重要性が提起されるが、ここに本書のポジションが集約されているといえるだろう。

以上の概要にみられるように、本書には挑戦的、特徴的な点がいくつか見受けられる。そこで以下、三点についてコメントを述べておきたい。第一に、今日の教育研究が細分化、多様化したなかで、三人の著者によって、これらの領域を「教科書」として位置付けることは可能なのか、という疑問である。確かに本書の細部を指摘すれば、「誤読」や「もの足りなさ」を見つけることは不可能ではない。しかし、評者はそのような欠点を補ってあまりある「利点」に着目したい。本書の特徴として重要なのは、三人の著者が「序」と「結」で示されるポジショナリティを共有し、「教育学全体の見取り図」を提供した点にある[3]。教育学が教育研究を網羅することの不可能性に直面しているなかで、本書はあえてこのような課題に取り組んでいるのだが、ひとまず成功しているといえるのではないだろうか。

第二の特徴は「重要ポイント」にある。確かにそれは、今日の「教育学をつかむ」上で必須の項目に関して、概念の解説や論争の整理をしているものが中心である。もちろん、それは教科書として当然である。しかし、いくつかの項目はそれだけには止まらない含意を持っているように感じられる。むしろ、この「重要ポイント」において、著者は「挑戦的」に新しい教育学研究上の課題を提起しているのではないだろうか。たとえば「幼児教育とリテラシー」(86頁）「「友だち民主主義」の落とし穴」(259頁）は、近年の研究動向に依拠しつつも、これまでの教育学研究がほとんど論じていなかった問題を提起している。また、「日本の教師の実践記録」(172頁）はやや控えめな表現ながらも、「実践記録を綴り読み合う文化」の重要性を示唆している。これらはそれぞれ、哲学、社会学、歴史学との接合のなかで今後、検討されていくことが予想される。その意味で「重要ポイント」は「公共性の再構成」に向けて、議論の幅とこれからの研究課題を広げるものとして、読者は積極的に読み解く必要があるだろう。

最後に、本書を通して「教育学」をつかむことができるのか、といういささか挑発的な疑問を投げかけてみたい。著者は「教育学」をつかめると想定している。しかし、教育学をつかめないと想定することは、もちろん可能である。後者の場合、二つの選択肢が予想される。一つは、社会科学的な教育研究に居直る道である。もう一つは、他の研究を無視して、教育学を名乗り続ける道である。これらは、教育学の「シニシズム」と「決断主義」とでもいうことができるだろうか。しかしながら、著者は、どちらの道も選択することはせず、教育と社会や政治の間に立ち、また、教育と教育研究の間から、「教育学」を構想しようとしたのである。これが、著者のいう「教育学」だろう。この「教育学」は、その地点から「教育に何ができるのか」(266頁）を考えようとしている。私たちは、そこから導き出された教育の可能性のもとに、そう遠くない未来への希望をつかみ、「希望をもって教育学を語る」[4]ことができるのではないだろうか。

もちろん、これからも社会や政治が変化するなかで、教育は変化し続ける。そのときに、「教育学」の語りもまた、変化しなければならない。そのとき、もし私たちが「教育と教育学」をつかもうとするのであれば、本書は、その教育学の新しいパラダイムの模索のための出発点の一つを示してくれるであろう。

注

1）木村元、小玉重夫、船橋一男『教育学をつかむ』有斐閣、2009年。以下、本書からの引用は、後ろに頁数を挙げる。

2）教育史研究のレヴューは、近年いくつか出されているが、そのなかでも、教育社会史研究の動向をまとめた最重要論文として、橋本伸也「歴史のなかの教育と社会—教育社会史研究の到達点と課題」『歴史学研究』第830号、2007年、1-11，43頁を参照。

3）なおこの点は、近年、単著で書かれた二冊の教育学の教科書――田中智志『教育学がわかる事典』日本実業出版社、2003年、および広田照幸『教育学』岩波書店、2009年――にも共通しているといえるだろう。

4）広田、前掲書、vi頁。

謝辞：本稿を執筆するにあたり、2009年度の「教育史研究の課題と方法」（木村元氏担当）と「基礎教育学方法論演習」（小玉重夫氏担当、評者はTAとして出席）での検討は大いに参考となった。また本研究科の数名の院生は、本書に対する有益なコメント・感想を寄せてくれた。末筆ながら、ゼミ参加者、関係者各位に感謝したい。